



東京駅復原。100年前の姿を100年後につなぐために。

約1世紀の時を越え、東京駅丸の内駅舎が1914年創建当時の姿へと甦る。鹿島建設はいま、“赤レンガ駅舎”的保存・復原工事を共同企業体で進めています。2011年5月、戦災から60年以上失われたままだった南北のドームがついに完成。復原された東京駅が、工事用の仮囲いから姿を現し始めています。現存する駅舎は可能な限り保存・活用して創建当時の姿へ。ドーム内部の天井・壁面に施された装飾類も、過去の文献をもとに専門家や伝統職人の技によって復原されます。

この文化的遺産を未来にわたって守るために行われたのは、駅舎建物を残したまま地下を構築し免震構造にすること、「居ながら」の免震化工事です。全長約335m、総重量約7万トンもの巨大駅舎をいちど鉄骨支柱で仮受け。安全性と強度を確保したまま、建物全体をジャッキで持ち上げたあと、これまで駅舎を支えていた1万本以上の松杭を撤去。新たな地下躯体を

構築し、352基の免震装置に建物の荷重を移動するという工事は、日本最大規模の免震化工事となりました。

東京駅は、1日の乗車人数約40万人、列車の運行本数約3,600本という巨大なターミナル駅。この機能を維持しながら行われる保存・復原工事は、利用者や列車運行の妨げにならないよう、乗降客の通行範囲では終電後の短い時間を縫って行われ、狭い場所では大きな重機を使わず、人の手によって作業されます。1日最大1,000名の作業員による24時間体制の工事、完成は2012年10月です。100年という歴史を支え、次の100年に継承する。新しいものをつくるだけでなく、古き良き技術を未来へつなぐことも、この姿を最先端の技術で守ることも、建設会社としての誇りです。無数の思いや出会い、文化が交差した日本の玄関。7万トンの駅舎よりも重い価値をずっと先までつなぐために、私たち鹿島建設は、今日も100年先を見据えて工事を続けています。



1914年創建時の姿に復原される東京駅丸の内駅舎・完成予想図(2012年完成予定)

100年をつくる会社
鹿島